
大学図書館問題研究会 京都

〒607 京都市山科区大宅山田町34 京都橋女子大学図書館 小林倫道気付
(Tel) 075-574-4118 (Fax) 075-574-4124

第82回全国図書館大会に参加して

井上 雅人

10月23日から3日間、第82回全国図書館大会が大分、別府を会場に2000名以上の館種を越えた図書館関係者の参加で開催されました。今回、私は初めてこの大会に参加する貴重な機会を得ることができました。詳細は後日、図書館雑誌等で報告されると思いますが、一番ホットなところで、大会のおおまかな特徴を私の感想も交えながら紹介したいと思います。

初日の開会式は別府市内がほぼ一望できる地上100mのグローバルタワーの下にあるビーコンプラザという近代的なコンベンションホールが会場です。開会式で最もインパクトが強かったのは、大分県知事の記念講演でした。大分県は「一村一品運動」やテクノポリス構想など、地域活性化の施策を次々に打ち出し、一躍有名になった所ですが、その中心的人物、平松氏というのはなかなかの敏腕知事だな、と感じました。「地域づくりは人づくり」、「グローバルに考えローカルに行動を」等、独自の地方分権論を「立て板に水」といった感じで一気に話されました。何よりも県内各地域の実状が完全に頭の中にインプットされているようで、「こんな知事もいるんだなあ」（失礼！）と感心させられました。知事は現在、大分県が進めている「一村一品」ならぬ「一村一館」運動を紹介し、図書館が地域の人づくりセンターの役割を果たすべきことを強調されました。今大会の分科会でも大分県は「図書館づくりマニュアル」などの取り組みが紹介されていましたが、その底流にこうした知事の姿勢があるのでしょうか。話はそれますが、立命館は1999年にこの別府の地に学生の半数が留学生からなる「立命館アジア太平洋大学」を開設します。知事は講演の中でもこの事に触れ、アジアとの交流を人づくりによって進め、新大学もその一環として位置づけていることにも言及されました。大分県が立命館に何を期待しているのかが、わずかながら掴めたような気がしました。立命館では新しい図書館構想が現在進行中ですが、こういう視点をもっと鮮明にした図書館づくりが必要だと思いました。

続いて栗原理事長の基調報告があり、①今大会の位置づけ、②本格的な高度情報化社会を迎える中での図書館の今後、③館種別にみたこの1年の動向と課題、④アジアと世界に開かれた図書館づくり、という点を中心に報告されました。その主たる論点は、情報化、国際化が進む中、図書館員は試されている、読書のもつ意味を深く理解し、かつ情報の達人たる図書館員を養成していくことが求められている、というような内容ではなかったか

と思います。ここでもテーマは人づくり＝図書館員づくりにあったように思います。

2日目は、14の分科会が大分市と別府市に分かれて行なわれ、私は大学図書館の「ドキュメント・デリバリー／ドキュメント・サプライヤーの今後の動向」というに分科会に参加しました。報告は5本あり、国立国会図書館のドキュメント・デリバリー、学術情報センターのILL、JICSTの文献複写業務、丸善のUncover、紀伊國屋書店のOCLCのFirstSearch、といういずれも原報提供サービスの最新の動向を扱ったものです。前2者は日常の大学図書館業務とも馴染みの深いものです。国会図書館では今年4月から開始したNACSIS-ILLとの接続の効果と位置づけ、文献複写サービスの実態、電子図書館を見据えた関西館への展望が報告され、学術情報センターはNACSIS-ILLシステムの現状と新CAT/ILLシステムの今後の計画が紹介されました。特に学術情報センターでは料金決済システムの改善や海外システムとの接続の拡大など、どの大学図書館にとっても日頃の業務と関連の深いものだけに今後の動向が注目されます。午後の報告ではUncover、OCLC、FirstSearchともに現在、立命で本格的な利用者への開放が検討されているものだけに興味深いものでした。いずれも検索を通じて見つけた文献がドキュメント・デリバリー・サービスを通じて簡単に入手できるというのですが、料金決済などの運用に問題を残しているように思いました。全体的に2日目の分科会は報告が少々多すぎて、あまり討論の時間もなく、ちょっときつい分科会だったようです。

3日目の全体会では14の分科会の報告が短時間でおこなわれました。ここで一つ一つを詳しくふれませんが、全体討論では各地の県立図書館の厳しい現状や「図書館の自由」をめぐる静岡や鳥取の貸し出し制限の事例が紹介され、白熱した議論となったことだけご紹介しておきましょう。いずれも大学図書館の中だけでは、見落とされがちな問題ばかりでした。ただ、全国図書館大会ということからやむをえないとはいえ、大学図書館をめぐる現在、進行している様々な問題が分科会にも全体会にも出てこなかったことに、多少の物足りなさを感じました。

かけ足で大会全体をむりやり紹介しようとしたので、つまらない報告になってしまいました。それにしても別府はこの時期、観光シーズンではないらしく、観光客もまばらだったのですが、その街に2000名をこえる図書館関係者が集まり、さながら図書館大会一色になったようです。私はのんびりと温泉につかり、大分の焼酎や魚を満喫でき、一時の骨休めもできました。みなさんも一度、お出かけになってはいかがでしょうか。

(いのうえ・まさと／立命館大学図書館)

目	全国図書館大会 (井上雅人) ……………	1頁
	自著紹介 (松延秀一) ……………	3頁
次	大図研京都数珠つなぎ⑩……………	6頁

支部報に関するご意見は最寄の支部委員または編集気付 (京都橘女子大学 ☎075-574-4113 (FAX 075-574-4122) ♥ PXX01651@niftyserve.or.jp またはNIFTY-Serve:PXX01651小林) まで

自著紹介

『障害者サービス (図書館員選書12)』 (日本図書館協会)

松延 秀一

やっと発行にこぎつけた — 日本図書館協会 (JLA) 障害者サービス委員会の一員として、執筆・編集にたずさわった立場からの感慨である。編集プランは小生が委員になった時、既にあった。つまりは、天満隆之輔・前委員長から藤井千年・現委員長時代への、10年ごしの課題だったのである。その後も二転三転してやっと刊行にたどりついたという次第。

この書については、「図書館雑誌」その他の機関誌で書評が出るであろうし、「大学の図書館」でも書評・紹介がなされるべきと思う。大学図書館における障害者サービスについては、東大総合図書館での試みなど散発的なものはあっても、全体としてはゼロに等しいのであるから。

ところで、「自著」と冠したが、これは羊頭狗肉、巻末の執筆者一覧12人中の1人にすぎない。もっとも、そのうち5人の編集担当の1人ではあったが。ただし、だれがどの章を分担したかということは明示されていない。実際のところ、全員の原稿を全員で読み合わせし、その上で5人の責任において、もとの原稿に大幅加筆したり構成を組み替えたりしているので、あえて明示しなかったのである。

さて内容についてであるが、主要には公立図書館向けなのはいたしかたのないところ、ただし、大学・学校図書館にも活用できるようにはしてある。そのためには大学図書館員側の主体的な読み込みが必要であろう。以下に提示する。

第1章 障害者サービスとは

第2章 図書館利用の障害とは

ここは全文精読してほしい。多分知らないことが多いであろうから。

第3章 サービス

大学の場合は、「来館者サービス」が必読。とくに対面朗読。学生の場合、同専攻の先輩や同級生がボランティアとして対面朗読する場合もあるが、図書館側としても支援できるようにしておきたい。

第4章 障害者サービスのための資料

大学の場合、この部分はそれほど重要ではないかもしれないが……。一読はしておいてほしい。

第5章 障害のある子どもへのサービス (省略)

第6章 サービスを進めるための環境整備

ハード部分にかかわる条件整備であり必読。

第7章 障害者サービスを行う人

どちらかと言えば、管理職向けか。ただし「障害者とのコミュニケーションの方法」は全員必読。

第8章 図書館サービスとネットワーク

障害者サービス未経験が多い大学図書館としては、公立図書館始め、各種の類縁機関かの教示を得ることが多いと思う。

第9章 障害者サービスの運営と実務

予算・PR・人事について。どちらかと言えば、第7章同様、管理職向けと言える。

第10章 障害者サービスを支える法規・制度

大学(図書館)といえども、障害者基本法や「ハートビル法」の諸条項には従わねばならない。その上で、著作権法への対応も求められてくる。

終章 障害者サービスの将来

IFLA大会での経験からの提言。電子化図書の可能性が示唆されている。マルチメディアとかインターネットとかは、果たして、障害者(学生も)の情報アクセス権の拡大に寄与しているか?

国立大学図書館においては定員削減攻撃がかけられているので、国立大学図書館協議会で障害者サービスの研究班が発足し、報告書やガイドラインを何とか作成したとしても、現場ではどうか? ボランティア導入に道を開くようなしろものができあがっても困るのである。障害者サービスも新しい需要として、増員要求できるようにしなければならないだろう。これには管理職側の決断——左遷を覚悟しての?——も必要となるのではないか? 大図研や組合の後押しも必要かもしれない。

本体価格 1,900円は少々高いかもしれないが、ぜひご一読願いたいと思います。

(まつのぶ・しゅういち/京都大学化学研究所図書室)

(回次頁より)

【1987:39:国際日本文化研究センター】世界へ向けての日本情報の発信基地がこの新設研究機関のメインテーマの一つであった。日本の大学図書館・研究機関自体が日本情報の集積体であるので、後発のこのセンターが何を収集するかで考え出されたのが、「外国語で書かれた日本研究図書」、「日本語に翻訳された日本研究図書」、「外国語に翻訳された日本図書」をメインコレクションとすることであった。図書購入費は年間1億5千万円、10年で25万冊の収集計画で、初年度アルバイト2人を入れて3人の出発であった。また、イメージレベルの日本情報の収集も計画され、それらと図書の書誌・所蔵情報をネットワーク環境下で世界へ発信することが第一ステップであった。さらに収集した全文情報の提供が考えられ、検討された。ここでの最大の壁は著作権・版面権・意匠権であり、文化庁著作権課を招いて検討会が行われた。その結果、莫大な予算を投じて著作権者と契約して全文及び全イメージを提供するか、著作権の切れたものを提供するかのどちらかとなった。エンドユーザが後者の著作権の切れた句の過ぎた知的情報で満足するとは思えない。今後のDJ（電子雑誌）及びDL（電子図書館）の動向にも深く関わって来ることである。なぜなら美味しい知的情報はほとんど商業出版が押さえているのだから。

【1991:42:附属図書館】ILLシステムの導入・稼働が主な課題であった。結果、利用者の手元に届くのが2日短縮された。その他の相互利用の基本的枠組みはほぼ変化せず、業務は増加し、複雑化した。

【1994:45:文学部】30年前にタイムスリップしたような第一印象であった。最大の問題は組織・財政であり、危険な状態であった。

【1995:46:附属図書館】ネットワーク環境下での全学的な次期システムの更新計画、電子図書館の企画、組織改組の課題をかかえつつ、構造的な財政難、スタッフ削減による組織の危機等々…………… We are now facing a crisis. (1996・9・27中秋名月)
次は、京都府立医大の中野文子さんです。

「数珠つなぎ」のルール

①内容は硬軟自由。②原稿量も1ページ程度以上で自由。③執筆者には次回執筆者を指名する義務があります。④指名された人はもちろん拒否権なし。

いつもニコニコ現金払い

会費納入はお済みですか？

●—●—●●●—●●—●—●●●—●—●●—●●●●—●—●●—●—●●●●—●
 | 戦慄の新コーナー!!

● 大図研京都数珠つなぎ 第10回

京都大学附属図書館
 情報管理課図書受入掛

みずのたかおさ |
 水野孝夫 さん ●

【1996秋：48：京都大学附属図書館】

【1966:18:経済研究所】目標のないまま社会に出たところが京都大学であった。徒弟制度の初仕事はヘルメスで打った青い原版や鉄筆で書いた蠟紙を小型謄写版で指定された枚数を白紙カードに刷ることであった。指が油性インキで真黒、指を拭きながらカードが汚れないよう気をつけ刷りに刷ったものだ。数年して小西六から電子カード複写機が製品化され、ホッとしたのを覚えている。ほぼ同時期にIBMタイプライターが導入され、テープで印字の美しいカードが製作出来た。経済研究所では経済学部と共同で、数年に1回経済資料協議会の季刊索引誌「経済学文献季報」を全国の加盟館から送られて来る原稿カードを基に手作りで編集していたので早速参加した。採録誌一覧、分類順書誌一覧、著者名索引からなる編集で作る喜びのある、面白い作業であった。現在は学術情報センターから経済文献DBとして提供されている。また「日本経済統計総合目録 3分冊」の編集にも関わり、担当の全国の農林系図書館の書庫に入れてもらって書誌・所蔵調査を行った。私の担当した農林業編もほかの2編と同様に調査は困難を極めた。総合目録の品質は各図書館の質で決まると実感したものだ。出版助成金が急に付いたので出版されたが、今も調べ切れていない未完成の目録と思っている。

【1980:32:医学部】閲覧カウンターに座った途端、『雑誌が出せない』と臨床医が感情を込めて直接文句を言う。'70年代は医学雑誌のタイトルがドイツ語から英語に激しく変化する時期であった。当時は最新誌名のもとにバックナンバーを絶えず移動させていた。しかし、臨床医の引用文献にはその年々の略誌名が記載されている。例えばZeitschrift...の誌名の雑誌が“C”“J”のところに並んでいた。それを指摘されていた。医学図書館の成立が各教室雑誌の集合体であったことから、仕方のないことであった。そこで、検討後、最新誌名方式から個別誌名方式の配列に直すこととなり、約5万冊を1年の予定が5年もかかってしまった。パズルのように1度移動しだすとやめる訳には行かない。同時に所蔵している全誌名の調査を完了した。ほかに医学図書館系では最後を争うMEDLINEのオンライン情報検索を導入した。公衆回線で音響カプラを使用して接続した。暗緑色のディスプレイに明るい黄色の文字が出現したときには感激した。

【1985:37:原子炉実験所】原議書が書けない。総務課長氏は、歴代の新米図書掛長はろくな原議書が出て来ない、とニカニカしながら力を込めて言う。図書系は書いたことがないのだ。そこでレクチャーを申し込み、親切にも1日コースで原議書のすべてを教授してもらった。小役人の世界は“表現がすべて”なのだとの説、有り難く拝聴したものだ。しかし熊取の遊びの環境は最高である。

(☎前頁へ)